

親・友だちとのコミュニケーションのゆくえ

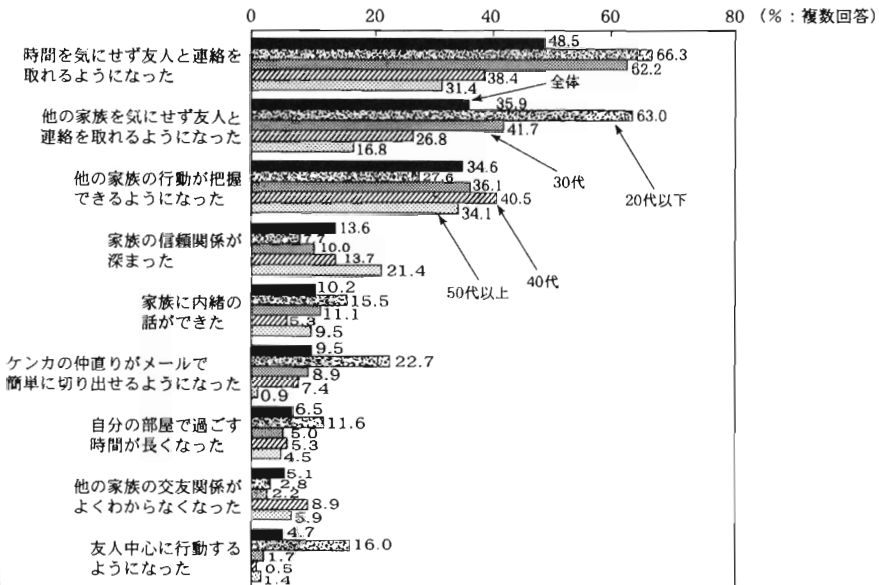
平成十五年版『情報通信白書』(1)によれば、平成十四年度末におけるケータイの契約数は約七、五六六万契約であり、普及率は約五九%となる。本稿では、このようなケータイの普及が、子どもたちの人間関係や親子関係にどのような影響を与えているのかを考えたい。

まず、『平成十三年度ITによる家族への影響実態調査』(2)から、ケータイの子どもたちへの影響を探ってみよう。この調査はインターネットとケータイの両者に関するものであるが、わが国ではインターネットもケータイからの利用が多く、この調査結果はケータイの子どもたちの人間関係への影響を検討する上で手がかりにな

佛敎大学教授
富田英典とみたひでのり

1 ケータイの普及率とその影響

ケータイやインターネットを使うようになってどのような生活の変化があったのだろうか。調査結果をみると、二〇代以下では、「時間を気にせず友人と連絡を取れるようになった」(六六・三%)、「他の家族を気にせず友人と連絡を取れるようになった」(六三・〇%)が高い数字を示している。それに対して、四〇代では、「他の家族の行動が把握できるようになった」(四〇・五%)が高い数字を示している。つまり、子どもたちは親の監視から解放されたと回答し、親世代は他の家族の行動が把握できるようになったと回答しているわけである



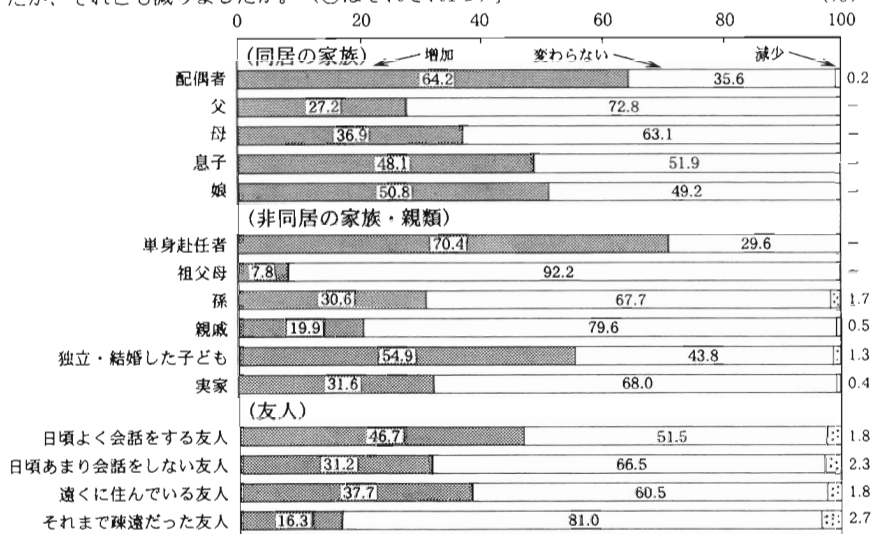
(備考) 回答者はITを利用し、同居の家族がいる771人。

図1 ITによって変わる生活行動

(出典：内閣府『平成13年度 ITによる家族への影響実態調査』2002)

(図1)。
次に、連絡を取る回数については、夫婦間、娘、息子と連絡を取る回数が増えたと約半数の者が回答している。ただ、両親と連絡を取る回数が増えたと回答している者の割合は少なくなる(図2)。
このように、ケータイは夫婦間のコミュニケーションを促進しているが、親子間のコミュニケーションに関しては認識のズレが生まれていくことがわかる。
親にとってケータイ利用の利点は、安全性とセキュリティにある。常に、子どもの安否を確認でき、子どもを監視できるケータイは、親にとってはありがたいメディアである。しかし、子どもたちは、親からケータイに電話がかかって来てもいつも応答するとは限らない。なぜなら、子どもたちは、仲間とはアクセスしたいが、親とは一定の距離をおきたいと思っているからである。それを可能にするメディアがケータイなのである。

「あなたは、携帯電話やインターネットを利用するようになって、連絡をとる回数は増えましたか、それとも減りましたか。(〇はそれぞれ1つ)」 (%)



- (備考) 1. 回答者は該当する家族・親類がいるIT利用者。回答者数は「単身赴任」「孫」を除き100人以上。「単身赴任」は27人、「孫」は62人。
 2. 「増加」は「増加した」「どちらかという増加した」と回答した割合の合計。「減少」は「どちらかという減少した」「減少」と回答した割合の合計。
 3. 非該当者を除いて計算した割合。

図2 ITを利用することで家族や友人とのコミュニケーションが増加
 (出典：内閣府『平成13年度 ITによる家族への影響実態調査』2002)

2 ケータイの特性と仲間を確認する方法

ケータイの特性について、シャントル・ドウ・グルネーは、常に連絡が取れる(リーチャビリティ)「即時性(immediacy)」「移動性(mobility)」の三点をあげる(3)。これらの特性が、ケータイ独自の利用方法を生み出している。

子どもたちがケータイを利用している様子を見ると、まず最初に気づくことがある。それは、自分のケータイにメールが届くと、すぐにその場で返信していることである。それは、いつでも連絡が取れることが彼らにとっていかに重要であるかを物語っている。

ケータイが登場するまで、子どもたちがコミュニケーションを行

う場所は、学校内が中心であった。仲のいい仲間はいつも一緒に行動することになり、それが仲間であることを確認する手段でもあった。ところが、ケータイが登場することにより、ケータイへの連絡にすぐに応答することが、仲間であることを確認する方法として新たに加わったのである。ケータイの特性である「常に連絡が取れること (reachability)」は、子どもたちの友人関係にとって最も重要な要因となったのである。

そして、このような特性を持つケータイは、新しいコーディネートション(調整)を可能にした。

3 ミクロ・コーディネートション

ノルウェーのケータイ利用を研究したリチャード・リンとピアギッテ・イットリは、コーディネートションを「道具的コーディネートション」と「表出的コーディネートション」に分類する(3)。前者は、誰かと会うための日時を決めることなどである。ケータイが登場し、私たちは一度決めた日時を簡単に修正することが可能になった。また、おおまかな時間と場所を決めておき、ケータイで連絡を取りあい微調整をしながら落ち合うことが可能となった。このような「道具的コーディネートション」

を、リンとイットリは「ミクロ・コーディネートション」と呼んだ。

電信術が登場するまで、遠距離通信は輸送によって行われていた。手紙は輸送されているのである。その意味で、輸送と通信は事実上同義であった。そして、モースの電信術が登場し、輸送と通信は独立した発達を遂げる。移動中の人は通信手段を持たなかった。誰かと連絡を取るためには、どこかの場所にとどまっている必要があった。その意味では、輸送と通信は両立しないものだった。ところが、ケータイが登場し、このような輸送と通信の関係を一新することになったのである。

私たちは、帰宅途中の夫に買い物を頼んだり、待ち合わせの時間に遅れることを伝えたりしている。とくに、共働きの夫婦にとって、このような「ミクロ・コーディネートション」は、日常的なケータイ利用形態であろう。そして、それは親子間のコーディネートションについてもあてはまるはずだ。その意味で、ケータイが可能にした「ミクロ・コーディネートション」によって、現代家族は、効率的なコミュニケーションを行うことが可能になったはずである。実際、前述した調査結果でも、家族と連絡を取る回数が増えたとする回答が約半数あった。

そして、子どもたちも、ケータイを利用して放課後どこかで落ち合うことが可能になったのである。

4 ハイパー・コーディネーション

リンとイットリは、ケータイが可能にするコーディネーションは、「ミクロ・コーディネーション」とどまらないという。彼らは、ケータイの道具的利用、表出的利用、ケータイによる自己プレゼンテーションの三つの次元を、「ハイパー・コーディネーション」と呼ぶ⁽³⁾。

ケータイは、感情的・社会的コミュニケーションを可能にするものであり、それはケータイの表出的利用であるという。子どもたちは、ケータイを利用して、お互いの関係性を確認し合う。メールの交換では、楽しいメッセージを送ったり受け取ったりすることで、彼らの友人関係や友情は深まり維持されているのである。ケータイで誕生日に「おめでとう！」とメールを入れたりすることで、仲間意識を確認しているのである。また、ここでは、自分たちの仲間内でしか通用しないスラングが用いられ、それが彼らの仲間意識を強めることになる。

さらに、ケータイの使い方、身につけ方など、ケータイを利用した自己プレゼンテーションが行われる。子ど

もたちは、新しいタイプのケータイが売り出されると、上手に買い換える。古いタイプのケータイを持っていることは恥ずかしいからだ。ただ、新しいケータイを持っているても、それを見せびらかすような行為はしない。どんなケータイを持っているか、どのように持ち歩いているかが、子どもたちが自分らしさを表現する自己プレゼンテーションとなっているのである。

5 友人関係をリセットできるケータイ

多くの子どもたちがケータイを所有するようになると、お互いの連絡はすべてケータイで行われるようになる。ただ、その結果、ケータイを持っていない子どもは仲間の輪からはずれることになる。ケータイの番号は知っていても、友だちの自宅の電話番号までは覚えていない。なんらかの事情でケータイを解約せざるを得なかった子どもは、気が付くと仲間からの連絡が途絶え、いつしか仲間集団から疎遠になる。教室でケータイを使用して、教師に取り上げられそうになると生徒が必死に抵抗するのは、そんな子どもたちのケータイの道具的利用に支えられた友人関係が背景にあるからだ。

このように、子どもたちの人間関係にケータイが深く

かわるようになったために、子どもたちは、誰かと知り合いになると、まずお互いのケータイの番号とメールアドレスを交換することになる。その後、親しい関係になるかどうかはわからない。もし、あまり好きになれない相手なら、応答を遅らせたり、メールに返信をしなれば、次第に疎遠な関係になれる。

ただ、一度ケータイに友だちの電話番号やメールアドレスを登録すると、学校を卒業してもわざわざ登録を削除する場合は少なく、関係はそのまま継続することになる。これまでは、学校を卒業すると、友だち関係は一度解消され、新しい生活環境の中で新たな友人関係を形成していた。しかし、ケータイは過去の友人関係をいつでも呼び出すことを可能にする。そんな過去の人間関係は、ケータイを買い換えて電話番号が変わったり、メールアドレスが変更されたりした場合に、一度に全部リセットされるのである。

*

*

ケータイによって、子どもたちの人間関係や家族関係は変化し始めている。ただ、ケータイの利用はまだ始まったばかりである。ケータイを単なる子どもの玩具にしてしまうのか、それとも家族のコミュニケーションを豊

かにし、それぞれの年齢に合った利用方法を両親が子どもに対して提供できるかが重要である。子どもからせがまれてケータイを買うのではなく、親が子どもにケータイを与え、それぞれの年齢に合った利用方法を教えることが大切であろう。ケータイで親子関係が変わるのではなく、どのような親子関係を築きたいかで、ケータイの利用方法が決まるのである。そして、それが子どもたちの友だち関係にも反映する。

ケータイを使いこなすことは、これからの社会を生き抜いていくサイバーバル・ストラテジーにも通じる。まず、親世代がケータイの利用に習熟することが今最も求められていることなのである。

〔参考文献〕

- (1) 総務省、『情報通信白書 平成十五年版』二〇〇三
- (2) 内閣府、『平成十三年度 ITによる家族への影響実態調査』二〇〇二
- (3) ジェームズ・E・カッツ、マーク・オークス(著)、立川敬二(監修)、富田英典(監訳)、『絶え間なき交信の時代——ケータイ文化の誕生』NTT出版、二〇〇三
- (4) 富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦『ポケベル・ケータイ主義! ジャストシステム、一九九七
- (5) 岡田朋之・松田美佐(編)、『ケータイ学入門——メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』有斐閣選書、二〇〇二